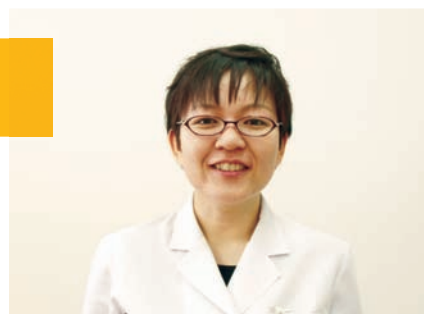


# 在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第9回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



医療機関の医療の質を定量化するための「医療監査」には、さまざまな尺度がある。褥瘡発生率や患者対看護師の比率、病室の広さ等々。

寿命の延長だけでは測れない時代である。「より良く生きる」、「よりその人らしく生きる」手助けとしてどんな医療を提供できるのか、国（国民）は健康寿命と医療の関係の数値化を求めているようだ。

保険薬局での業務を見つめ直すと、自分たちの存在意義を社会に実績提示できていないように感じる。保険薬局の医療の質の定量化を考えるとときに、私たちには示せる指標がないことに思い当たった。天井から降ってくる処方せんを処理して薬価差益と手数料を糧にすごしているうちに、自分たちの仕事の誇りを身内にも後輩にも伝える言葉がなくなってきてはいないだろうか。

10年近く前、患者さんに言われた言葉が今も忘れられない。

心療内科に通っている偉丈夫な体格の、自分と同年代の青年がいた。薬局の窓口で1週間から2週間ごとに会話をし、少しずつ笑顔のコミュニケーションがとれていた人だ。ある日、彼が再就職をするために、ハローワークに行った話題になった。自分の職歴と資格では求人がヒットしない。ヒットしても賃金は雀の涙。そこで、ふと試しに薬剤師のカテゴリーで検索したそうだ。「その場

でパソコンをぶち壊そうかと思いました」、「薬剤師ってだけで、楽に働いて給料あんなにももらえるんですね」。口は笑っているが、目は笑っていなかった。

なんとか目をそらさずに、「それなりに苦労もあるんですよ」と言うのが精いっぱいだった。

当時の自分を思い返すと、退社時間になったら速やかに帰ることを目標に、患者さんの顔ではなく、処方せんと薬歴でその人を振り返るような働き方をしていた。彼の言葉は、確かに私をよく見たうえで社会的に評価されるにあたわらない者への非難だった。笑顔のコミュニケーションの内側の怒りに触れて、印象に残っている。

たとえば、子どもが憧れる職業として私たちは評価されているか？社会に何かしら、時給に見合うものを返しているか？

一消費者の視点で保険薬局を見ても、前述の問いに示す客観的な指標を私たちは持っているだろうか？これからつくっていけるだろうか？

在宅訪問の中で、患者さんが「待っていたよ」と満面に笑みを浮かべてくれる瞬間がある。あるいは、一時入院先を訪ねた際の——ほっとしたからだ、と思いたい——泣き顔。何がそれをもたらすのか、いまだ定量化できていないが、社会が求める保険薬局の薬剤師の役割、質についてのヒントが隠れているのかもしれない。